

# ミズバショウ

澤井

純白の衣を纏いキリリと立つ姿、ご存知ミズバショウ(水芭蕉:右上写真)です。懐メロの定番の「夏の思い出」に歌われているので、夏の花とされているかも知れませんが、水芭蕉自身から見ると早春の花です。以下に少し詳しく見ましょう。

白く花びらのように見えるのは<sup>ほう</sup>苞と呼ばれ、葉が変形したものと考えられています。中央の軸の周りには小さな花が沢山ついていきます。花には蜜や芳香は無いそうです。和名の水は生息場所に、芭蕉は葉に由来があるようです。なお近縁種のザゼンソウ(座禅草:右下写真)は苞が色違いです。

さていよいよ本題です。

誰でも手軽に見に行ける水芭蕉の自生地は長野県の梅池自然園でしょう。ここは吹溜りになりやすい谷間ですが、雪田が消え去る直前に水芭蕉は雪の下で芽を出し、苞からの熱で雪を融かして顔を出して咲き始めます。つまり、まだ雪が残る早春に咲く花と言うわけですが、山岳地帯では雪田外側の季節感とずれているかも知れません。

水芭蕉はなぜこのような生き方をするのでしょうか？至るところ氷に覆われた氷河期。そこで氷ではなく雪が積もった土地を探し、まだ雪が残っている内に花を咲かせ受粉し種を育て、雪融けに合わせて種をまく。厳しい氷河時代の過ごし方を引きずっているようにも見えますが、氷河時代の再来を見据えての準備かも知れません。

水芭蕉はもう一つ特徴的な生き方があります。冷たい水の流れる湿地を好むことです。一般的に生き物は取り入れた栄養分を自分に必要な形に化学変化をさせて利用し、不要になった成分を化学変化させて排出します。これらの化学変化には適温があり、ここから外れると生物活動がし難くなります。水芭蕉は冷蔵庫の内部のような水温の所に育ちます。また植物一般に根が活動するために酸素が必要で、水までも停滞した湿地は不適です。水芭蕉がこの2点をどのようにして解決したのか不明ですが、解決すれば競争が有利になることは確かです。

水芭蕉を見ると、豊かなアフリカの森から条件の厳しい極地へ生活域を広げて行った人類の足跡と共通点があるように感じます。



12/03/01 滋賀県高島市